

Malyan Newitt "A History of Portuguese Overseas Expansion, 1400-1668", Routledge, 2004, 300 ページ

齋藤 俊輔

歴史家たちは、ポルトガルの海外進出について、あまりにもまちまちな解釈をしているという悪評が立っている。その態度は、まるで、ある動物をそれがどんな種に属しているかに納得できずに、その行動を観察しているかのようである。【同書252ページ】

上記の引用は、同書の最終章の冒頭部分である。これを見るかぎり、著者Malyan Newittは、ヨーロッパ海外進出史や植民地史の研究者がもつ、ポルトガル海外進出史への見方に強い反発を感じているようだ。歴史家たちの視点は、本当にまちまちで、イギリスが大英帝国であったようにポルトガルを海洋帝国とみなすこともあれば、ポルトガルの海外進出をレコンキスタの延長と捉えたり、あるいはそれを資本主義の原初的な活動と見たりすることもあるものというのだ。

一般的にいつて、ヨーロッパ海外進出史の歴史家は、インド洋世界においては、オランダ東インド会社や大英帝国の与えた影響を重視しているし、南アメリカ大陸においても、華々しいスペイン帝国の侵略や植民地経営をとくに論じる傾向にあって、ポルトガルの海外進出は軽視されている。

しかし、ポルトガルは、オランダ・イギリスの台頭の中でも、20世紀後半まで、ゴアやマカオ、モザンビークなどを植民地として維持しており、インド洋における彼らの影響を全く無視してしまうわけにはいかない。また、18世紀には、ポルトガル本国に全盛期をもたらしたブラジルの金鉱が発見されるなど、ポルトガルの大

西洋世界での活動も注目しておく必要がある。

したがって、著者は、そのようなポルトガル海外進出史の現状を鑑みて、学生向けの手引きとしてというより、ヨーロッパ海外進出史の研究者へ向けて同書を著したのではないだろうか。

ところで、著者のプロフィールはというと、この分野で最もよく知られる歴史家のひとり C. R. Boxerの後継者で、現在ロンドン大学キングスカレッジで教鞭をとっており、ポルトガル海外進出史の中でも、東アフリカのモザンビーク史研究で数々の業績を残している。主要著書のひとつには“A History of Mozambique”(1994)があり、実証的な研究を踏まえ、同書でポルトガル海外進出の約半分に当たる250年の歴史を著すことを試みたのである。まずは同書の内容を示しておく。

List of maps/Preface/Glossary/Maps

1. 1469年までのポルトガル人拡張の起源
2. ポルトガル人拡張 1469-1500
3. 東洋と大西洋でポルトガル人拡張 1500-1515
4. ポルトガル人ディアスポラ 1515-1550
5. 絶頂期のポルトガル帝国 1550-1580
6. 挑戦と応答: ポルトガル帝国 1580-1620
7. 敗北と生存 1620-1668

8. ポルトガル人拡張の理解

Bibliography/Index

ここで見るように、同書は非常にシンプルな構成となっている。実際、本文も各章の時代区分にしたがい、ヨーロッパ・アジア・アフリカ・ブラジルそれぞれの状況を年代をたどって、簡潔にまとめている。ただ、各章のタイトルはある意味で革新的である。明らかにこれまでの研究書にない表現が見られるのだ。第4章 ポルトガル人ディアスポラ 1515-1550は、そのひとつである。

我々はこれまで、ポルトガル海外進出史のスタンダードとされる、C. R. Boxer "The Seaborne Empire"(1969) や、Bailey W. Diffie & George D. Winius "Foundations of the Portuguese Empire 1415-1580"(1977) で、王室の管理貿易やインドニア領Estado da Indiaの統治などを中心にポルトガル人の活動を理解してきた。したがって、ポルトガル「海洋帝国」という言葉には慣れ親しんでいるが、それらをディアスポラとしては捉えていなかった。「ディアスポラ」は、故郷を離れてさまざまな地域に生活する人々やそうした人々のコミュニティを指す言葉で、この概念を用いるということは、ポルトガル海外進出を王室による支配構造として理解する立場からいえば、全く異なった考えである。

こうした見方が、ポルトガル海外進出史で広く受け入れられるようになったのは、Sanjay Subrahmanyam "Improvising Empire - Portuguese trade and Settlement in the Bay of Bengal 1500-1700"(1990)や同著 "The Portuguese Empire in Asia 1500-1700 - A political and economic history"(1993)による功績が大きい。彼は、インド洋世界でインドニア領が成立し統治するというこれまでの歴史

に、かつては注目されていなかったインドニア領の公務に就かないポルトガル人の活動を組み込んで、ポルトガル海外進出史に新たな視点を与えたのである。後者の活動を、彼は、"unofficial"あるいは"informal"という言葉で分類した。そうしたSanjay Subrahmanyamの構想を受けて、著者も、ポルトガル王室が主導となる活動を"official"、それ以外の活動を"unofficial"として、同書に活用している。

こうした概念は構成にも反映されており、王室"official"が強いイニシアティブを持った時期と、"unofficial"の活動が盛んになった時期を、はっきりと区別して論じている。簡単に説明すれば、第1章が王室主導のモロッコ遠征が続けられた時期、第3章はアフォンソ・デ・アルブケルケが王室独占交易と要塞の奪取などでインドニア領を構築した時期、第5章ではポルトガルがカスティリアを模倣し各地への遠征や領土拡大をした時期、そして第7章はポルトガル自身がヨーロッパの戦争に巻き込まれ、インドニア領の要塞のいくつかがオランダに奪われた時期、と区分されている。

したがって、第2・第4・第6章が、"unofficial"な活動がより強調されて描かれている部分である。こうした構成から、公的な権力が強まれば、私的な活動が停滞する、あるいは目立たなくなる、反対に公権力が弱まれば、私人の活動が栄えるというような様相が見て取れるようにも思われる。しかしながら、見かけ上"official"が"unofficial"を凌いで活動しているように見えても、実際の"unofficial"な活動は、自律して進められていた。"unofficial"な活動の自律性は、ポルトガル人が公務以外に私貿易や傭兵業に勤しむといった面に見られたが、現地に住み着いたポルトガル人とその混血児によるコミュニティの形成が決定的な意味を持つこととなった。ポルトガル人コミュニ

ティは、王室やインディア領と距離を保ちながらも、自治的な組織形態とをもち、しかもそれぞれの地域で貿易や軍事力の要として重要な役割を担っていたのである。

しかしながら、“official”と“unofficial”が完全に分離していたわけではないのは、同書で言及されているとおりである。ポルトガルの海外進出は、初期の段階から王室の出資だけで艦隊を派遣したわけではなく、民間資本も活用していたのである。15世紀半ばに、ポルトガル王室が、フェルナン・ゴメスという商人に、航海の権利を払い下げる形で、アフリカ西海岸の探索を続けたことは、その実態を示す良い例であろう。また、王室から派遣されたはずのヴァスコ・ダ・ガマにしても、インド洋世界で略奪などを行い、個人的な財産を築いたとされる。つまり、ある意味では、ポルトガル海外進出においては、王室の利益と個人の利益は両立するものであったといえるのである。

さて、こうしたポルトガル海外進出に対する著者の評価は、「ポルトガル人ディアスポラ」という一章を設けたところに端的に示されている、といってよいだろう。王室の艦隊派遣やインディア領に象徴される“official”と、ポルトガル人コミュニティの散在“unofficial”は、各地域で並存しており、全体としてはポルトガルから離れた人々の集合、すなわち「ポルトガル人ディアスポラ」としてひとくくりにして理解できるからである。

しかし、「ポルトガル人ディアスポラ」という言葉を用いる場合、注意が必要である。ともすれば、ディアスポラは一つの構造として誤解されるもあり、そうしたことは著者の意図に反することになるのである。著者は、「それが全く変化しなかったように、ポルトガル帝国Empireとして記述する」よう歴史家を批判しており、あくまで変容していくポルトガル

人の活動を描くことにこだわっている。この点は、John Russell-Woodの“The Portuguese Empire, 1415-1808: A World on the Move” (1998)との大きな違いで、著者は「ポルトガル人ディアスポラ」を時間軸において論じることに徹している。そうした著者の方法論によって、ポルトガル海外進出は、ポルトガル人ディアスポラの形成として再構成されたのである。つまり、同書の言葉を借りるならば、著者Malyan Newittは、ポルトガルの海外進出を「ポルトガル人ディアスポラの形成」と分類したといえるのである。

しかし、もちろん同書は完璧な概説書というわけではない。同書はポルトガル海外進出を一貫性のある歴史にまとめ直したという意味では非常に優れているが、具体的な記述では地域ごとに偏りがある。著者はすでに述べたようにモザンビーク史が専門で、同書は東アフリカについて記述は非常に詳しいが、マラッカ以東のそれは手薄である印象を受けるのである。だが、これを著者だけの責任として非難するわけにはいかない。ポルトガル海外進出史でも、東南アジアや中国でのポルトガル人の活動については、インド洋世界や大西洋世界に比べ、まだまだ研究が少ないのである。また、東南アジア史や中国史では、ポルトガル人の活動について関心が薄い上に、ポルトガル語史料も充分に利用されていない状況にある。したがって、それぞれの歴史研究者が双方の方法論を再確認し、今後ポルトガル海外進出史を再構成する必要性はあるだろう。そして、そうした研究の進展によって、同書の評価も変化するかもしれないが、当面は「ディアスポラの形成」が、ポルトガル海外進出を理解するために有効な手段となるのではないだろうか。

さて、日本での研究状況に目を向けると、ポ

ルトガルの年代記を所収・解説した『大航海時代叢書』が岩波書店から出版されており、ポルトガル海外進出史についても基本的な研究はある程度の段階にあるといってよい。また、生田滋はポルトガル海外進出についていくつかの論文を発表しており、その中でも『大航海時代のモルッカ諸島』(1998)は非常にオリジナリティのある研究として一読の価値がある。また、日本史では、高瀬弘一郎をはじめ、キリシタン研究で優れた業績が上げられている。

ところが、概説書となると、岡本良知『十六世紀日欧交通史研究』(1936)や、生田滋「大航海時代の東アジア」(1971、『東西文明の交流5 西欧文明と東アジア』)があるのみで非常に少なく、ポルトガルの海外進出の全体像を示した概説書は全く無い。もちろん、歴史研究者は同書や、これに類する優れた研究書を利用すれば事足りるだろうが、初学の者にとって適切な概説書は必要である。学生の手引きとしては、日本人研究者による概説書の出版もさることながら、海外の優れた研究書も重要であるため、Sanjay Subrahmanyam “The Portuguese Empire in Asia 1500-1700 -A political and economic history”(1993)や同書などが概説書として翻訳されることが望ましいだろう。